ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、
この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えられるように。
朝日新聞社員がつづる。

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

佐藤愛梨さん［6歳］

「悲しい時は笑うんだよ」

夏の日。3歳の姉は、出産を終えた母を病院に見舞った。小さな妹を目にして一言「だきたい」。母は姉をベッドにのせて、そのひざの上で妹をだかせた。

「じゅりちゃん」。姉は呼んだ。まだ母のおなかにいた時から呼んでいた名だ。

誕生前に女の子とわかり、両親は名前の候補を並べ、どれがよいかと姉に尋ねた。

「じゅりちゃんがいい」。即答だった。

それ以来、姉の愛梨さんは「じゅりちゃん」とおなかの妹に話しかけ、誕生を待ちわびていた。生まれた妹に母がかかりきりになっても、すねることはなかった。ただ、ベビーベッドの前で「愛梨も」と言ったことがある。母は「壊れないかな」と少々心配しつつ、愛梨さんを小さなベッドの上へ。

「私もバブコちゃん」。赤ん坊になった気分で、妹の口からおしゃぶりをぬきとると、よだれでベタベタなのを気にもせず、うれしそうにパクッとくわえた。

リカちゃん人形も、ウサギのぬいぐるみも姉妹で遊んだ。妹のために姉が着せ替え「これ、じゅりちゃん。これ、私」。2010年のクリスマスプレゼントは、リカちゃんの部屋。大喜びだった。

朝、妹が目覚めれば、姉はすでに幼稚園へ行った後。帰ってくれば、「愛梨ぃ、おかえりぃ」と出迎える。うしろをついて歩き、まねをしたがる。「じゅりちゃん、まねしないで」と嫌がられてもやめず、ついには「じゅりちゃん、やめて」と、はたかれたことも。「愛梨っ」と姉が母に叱られた。はたかれた記憶は、妹にはない。

「大丈夫。怖くないよ」

11年3月11日。愛梨さんは母に起こされた。「幼稚園行くの、行かないの」「行くー」。寝起きにぐずることはなく、この日もすぐに身支度した。

バス停で、母娘は、いつものように両手をつないで、足踏みごっこをしながら待った。声を立てて笑った。幼稚園のバスが来た。母は「よろしくお願いします」と娘を託し、手をふった。車中の娘はいつものように澄まし顔で座っていた。

バスは約5キロ先、高台の日和山に立つ日和幼稚園へ。

当時、近所の人が撮影した映像を、のちに母は手に入れて目を凝らした。地震発生から約15分後の午後3時すぎ。バスに乗る豆粒のような人影。2人目。真っ白なコート姿。愛梨だ。乗っちゃだめよ。見るたび母は叫びたくなる。

12人の園児が乗った。7人の自宅は海側だが、愛梨さんを含む5人は内陸。5人は本来、7人とは別のバスに乗るはずだった。映像の中、バスは海へ向かう。防災無線が「ウ〜」と大音量でサイレンを流し、「大↖

明日の風

舞台で高校生が演じる女性は、笑いながら恋人と別れた日を語る。「その日だけ、サラダに私の大好きなアボカドが入ってなくて、それであたしすっごい怒っちゃってさ。ほんとバカよね」。一瞬の間。「悔しいーっ」。彼女は絶叫した▽2013年11月の高校演劇コンクールの宮城県中央大会に出場した県立石巻高校演劇部「アボカドの降る朝に」のクライマックスだ▽観客席の私の脳裏には女川町で出会った人々が走馬灯のように浮かぶ。11年9月から取材を始めたこの町で、ほぼ10人に1人が東日本大震災の津波で命を落とした▽行方不明の母のことを語ってくれた中学生は「あの日に限って『行ってきます』を言わなかったんです」。最後まで笑顔を崩さなかった▽「アボカド」の脚本を書き下ろした3年生の佐藤そのみさんの経験にも重なる。金曜日のあの朝「おはよう」と言う妹のみずほさんに、いつものように朝は不機嫌な姉は何も返さなかった▽妹は石

津波警報、高台へ避難して下さい」と呼びかけていた。

バスは園を出発して約40分後、引き返す際に津波に襲われ、炎に包まれて、内陸に住む5人が犠牲になった。海側に住む7人は、親たちに引き取られて無事だった。バスの運転手は津波で車外に押し出され、九死に一生を得て幼稚園へ戻った。

夕方5時頃。父が園へ迎えに行った。「津波にのみこまれたかもしれません」としか聞かされず、周辺の避難所を捜した。

夕方6時半頃に園へ戻り、「バスと連絡はとれましたか」と尋ねたが、園長は首を横にふるだけ。連絡がとれていないのだと思い込んだ父は一晩中、避難所を捜し歩いた。

あの時、はっきり教えてくれたら。すぐ近くにいたのに。助けられたのに。その無念に、父は今も胸が張り裂けそうになる。

3日後、両親は愛梨さんを見つけた。園から約200メートル先。バスの中で抱き合うようにしていた子どもたち。腕に残っていたコートの白いファーを確認した。

なぜ海へ向かわせたのか。標高約23メートルの園にとどまっていれば助かった命だったのに。それを問うため、愛梨さんたち園児4人の遺族は11年8月、園側へ損害賠償を求める訴訟を仙台地裁に提起した。

園のマニュアルには大地震の時に「声掛けして、落ち着かせて園児を見守る。園児は保護者のお迎えを待って引き渡す」とあったが、園側は、園児が寒さに震えて不安な顔を見せていたため、一刻も早く保護者の元へ返してあげたいと考えた、と主張。

13年9月、仙台地裁の判決は、遺族の訴えを認め、こう説いた。――最大震度6弱の揺れが約3分間も続いていたから、地震の震源地等によっては巨大な津波に襲われるかもしれないことは容易に予想される。

無事だった園児の保護者が証言してくれた。車中で子どもたちが泣く中、愛梨さんは泣かずに「大丈夫。怖くないよ」と励ましていたことを。判決後、別の保護者も教えてくれた。車中の愛梨さんが、泣いている子のために歌をうたっていたことを。

震災直前、卒園式の準備中に涙ぐんだ先生へ愛梨さんはこう言ったそうだ。

「先生、悲しいときは笑うんだよ」

妹が泣き出した時も、一生懸命に笑わせようとする姉だった。

「お姉ちゃん」

園側は仙台高裁へ控訴した。両親たちは14年1月から再び裁判所へ通う。

震災直後、妹は「愛梨を連れて来て」と何度も訴えたが、母は「違う場所にいるから」と、変わり果てた姿の姉に最後まで会わせなかった。帰宅した小さなひつぎを妹が手でたたき「これなあに」と聞いても、母は「大事なものだから触らないでね」と繰り返すだけ。ひつぎを開ける時、母は妹を抱きあげて別室へ連れて行った。

妹は覚えている。「じゅりね、愛梨の最後のなにかを見たいって言ったけど、ママは、だっこして、見せてくれなかった」

葬儀の後、母は、妹の傍らに座って告げた。「愛梨はね、お星様になったんだよ」

妹の目から、母が初めて見る大粒の涙がボロボロと落ちた。それ以降は「連れて来て」と言わなくなった。なぜ言わなくなったのか。6歳の時に妹は語った。

「なんでうちに帰って来ないんだって言いたかった。でも、ちっちゃかったから、どう言えばいいかわかんなかった」

13年11月。母は、小学校のバザーへ妹を連れて行った。帰り際、妹は母に尋ねた。「3年生の教室はどこ」。戸惑う母に「探しに行こう」と妹は歩き出した。3年生の教室が並んだ廊下で母が立ち止まると、妹は「愛梨は何組」。困惑する母をよそに教室を見て回る。姉はいない。母が「帰ろっか」と声をかけると、「ん……」。

入学前、妹は、自分のノートに覚えたての平仮名で書き留めている。

「あいりがいればたのしいのに　じゅりはたのしくない　あいりがかいてきてくれればたのしいのに　あいりのことおもてるのに　あいりにかいてきてほしい　ねがいはそれだけ」

小学校入学後、妹は「お姉ちゃん」と口にするようになった。「私にもお姉ちゃんがいる」との訴えだと母はわかっている。

巻市の大川小学校6年生だった。地震後、姉は自宅で待った。自分はカップ麺で我慢。妹にあんパンを大事にとっておいた▽だが帰って来ない。日曜日朝、母の車で学校へ。あんパンも持った。途中で通行止めだ。誰かの声。「みずほちゃん、あがったよ」。道路にしがみついて泣いた▽妹を夢に見る。高校の保健室で休んでいた時も。起きた直後は現実を忘れ、妹に早く会いたいと思った▽「弟妹は」と聞かれると「2コ下がいるよ」と答える。それ以上は話さない。「つらいのは自分だけではないのに、自分のことを話すのは申し訳なくて」▽「アボカド」は青春群像劇だ。震災には触れていないが、主題の「後悔しない生き方」にあの日からの思いをこめている。劇中、恋人を亡くした女性のために1人、また1人と集う。雲間から、光が差し込むような終幕だった▽この欄は被災地の見聞録です。タイトルの「明日の風」にこんな願いをこめました。明日は新しい風が吹くから、だいじょうぶ。

発行人：小野智美（ono-s2@asahi.com）　川端俊一（kawabata-s1@asahi.com）　発行所：ASA 石巻中央（電話 0225－22－3669）

雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの雄勝病院の話から始めよう。

日だまりにミカンの皮と緑茶の葉

3階建て病院の外壁はすすけたように黒ずみ、ガラスのない窓の奥に院内の暗闇がのぞく。

色を失ったような光景の中で正面玄関は、赤や黄色、桃色の花に彩られていた。

被災後、病院は閉鎖になり、高台で診療所として再開した。

診療所へ移った職員たちが、正面玄関に祭壇をつくった。

花を手向ける人々のため、花瓶代わりのバケツを置き、水も用意。診療所への通勤途中に立ち寄り、世話をしていた。

2013年2月24日朝。病院の解体工事を前に、職員たちは「お別れ会」を開いた。母のため、父のため、夫のため、妻のために、家族があつまった。

あの日。入院患者40人全員と職員24人が犠牲になった。

読経が始まると、ゆっくりと雪が舞い降りてきた。

病院前に立ち並んだ子どもたちが天をあおいだ。白い雲が切れ、青い空がのぞく。やわらかな光が一帯をつつみこむ。

気温は零下。あの日の夜も、その寒さだった。

「お別れ会」の後、鈴木孝壽副院長（当時58）の妻、裕子さんは、笑みを浮かべながらも、目を潤ませて言った。

「ここに小さな病院があったことを忘れないでほしい」

解体工事中、職員たちはトラックの駐車場脇に祭壇をつくった。花を絶やさなかった。

解体後、職員たちは、更地になった跡地で、正面玄関があった位置に、ボランティアの手を借りて慰霊碑を建てた。

碑には、入院患者を筆頭に、64人の名前と享年を記した。周りに花も植えた。診療所への行き帰りに、水をやる。

職員みんなで大事にしていた小さな病院だった。

冬の晴れた日。

南向きの本館の窓から光がふりそそぐ。本館の外階段の日だまりには細く刻んだミカンの皮が干してあった。

（あら。なにかしら。香りがよいので、床に散らして、はき掃除に使うのかしら）

入院中の義母を見舞いに来た7年前、そう思いながら目に留めた光景を、裕子さんは今も忘れない。

看護師たちが、職員たちから皮を集め、1センチほどの長さに刻み、空き缶のふたに広げて干していた。

カラカラに乾いたら、ティーバッグに詰める。看護師たちが休日に100円ショップで買ってきたものだ。

休憩時間に緑茶を飲めば、その茶葉も新聞に広げて干し、ティーバッグに詰めた。

2005年に石巻市と合併するまで、旧雄勝町の町立病院だった。元々は、1954（昭和29）年に診療所として発足。翌55年に、内科、外科、産婦人科の病床計50床を備えた病院になった。当時の国勢調査で町人口は1万1214人を数えた。

石巻市と合併した時、町人口は4694人に減っていた。翌2006年度、長く入院できる療養型の病床40床を備えた市立病院になった。

患者の多くは、体の不自由なお年寄りだった。退院が見込めない人もいた。ひとりひとりの終幕を、職員たちは見守った。

過疎地の自治体病院の多くがそうであるように、雄勝病院も市の補助金なしには経費を賄えず、できるだけ市へ負担をかけないように、職員たちは節約を心がけていた。

ミカンの皮も、緑茶の葉も、そのためであり、入院患者のためでもあった。

BGMに民謡や童謡、演歌も流す

きっかけは今から10年前。

石巻地域の自治体病院の研究会で発表の順番が回ってきた。何を発表したらよいか。悩む看護師に、看護部長は告げた。

「身近なことでいいから」

最先端医療を手がけるわけではない。入院患者の平均年齢は85歳。ほとんどの人が、脳疾患の後遺症で体を動かせない。

県の広報紙で老人福祉施設が取り組んでいた「音楽療法」を見つけた。それを試すことに。

病院は本館と新館がL字形に立つ。どちらも3階建て。最上階が病棟だ。新館には5部屋ある。言葉を発することもできない重症の患者が多かった。

その新館の各部屋にCDプレーヤーが置かれた。

看護師、事務長、臨床検査技師が自宅から持参したものだ。

流すのは、民謡、童謡、演歌に軍歌。クラシック音楽や昭和の懐メロも。波の音、虫の声のCDも100円ショップで買っ↖

てきた。見舞いに来た家族から「あの曲が好きだった」と教わると、それも用意した。

2004年春から半年間、5人の患者の症状を見守った。

最高齢の95歳の患者は、口から食事ができず、胃に直接、栄養を送りこんでいた。看護師が声をかけても、「うん」「うんだあ」としか返さない。

音楽を流し、童謡「むすんでひらいて」を一緒に歌った。5カ月後。スプーンを手に食事を口に運ぶ。看護師はその回数に目を凝らし、「4口食べることができた」と書き留めた。

発表を終えた後も、新館ではBGMを流しつづけた。

「音楽を聴きながら仕事するのはリラックスできていい」

職員たちにも好評だった。

ミカンの皮と緑茶の葉は、次の発表にむけて考えついたものでもある。

体が不自由な患者の足を洗うのに、たらいの湯でせっけんを使った。

せっけんを洗い落とすのに、たらいの湯を入れ替える。これは手間だった。

せっけんの洗い残しがあればひふを傷めることもある。

何かないか。看護師がインターネットで調べて、緑茶の成分「カテキン」に殺菌効果があることを知った。水虫の予防にもなりそうだ。

茶葉を詰めたティーバッグをたらいの湯に入れた。洗い落とす必要はない。

浴室の段差解消の大工仕事も自ら

その後、茶葉の活躍の場は広がっていく。

患者がにぎりしめたままの手は、むれて、ひふがむけ、におった。せっけんで洗ってイソジンをつけるが、経費がかさむ。患者の負担にもなる。

「軍手をはめたら」

副院長が思いついた。コットン製の軍手を2週間ほど試したが、断念。毎日、軍手を交換しても、むれた。

次に、薬剤部長が提案した。

「かんきつ系がいい」

ミカンにたどりついた。ティーバッグに詰めた皮を、患者の手に、にぎらせた。しめたままの脇の下にも、はさませた。

ミカンの季節が過ぎると、茶葉を使った。

失敗談もある。寝間着の中にティーバッグを残して、家族に渡してしまった。「洗濯機がお茶っ葉だらけになった！」。驚いた家族から一報が入った。

週1回、患者の手足を洗う。週2回は全身をふいて着替えさせる。おしりは毎日洗う。

車椅子に座れる患者は、週1回、浴室へ連れて行った。

本館は1972年建築。新館建築は82年。両館の3階病棟の浴室入り口には段差があった。

本館は外注したが、新館の大工仕事は病院のボイラー技師が引き受けた。段差を採寸し、余っている板きれを集め、数日がかりでスロープを仕上げた。

入浴介助は重労働だ。患者は椅子からずり落ちたり、浴槽で沈んだりするので、支えていなければならない。それでも、看護師や看護助手たちは明るい声を出し、裸をさらす患者の心中を優しい笑いにくるんだ。

「たまにはおばちゃんがお世話するのもいいでしょ」「若い子のほうがいいよねえ」

本館の南側に県道が通り、その先に海がある。雄勝湾の入り江の奥にあり、水深は深い。

四季を通じて穏やかな水面に赤、黒、黄色の養殖用の浮き樽や浮き球が無数に並んでいた。

夏の日。仕事の後に、看護師たちは海で泳いだ。30年前に病院で働き始めた看護師は「私が勤める前の話ですよ」と語る。

女川町議会　福島を視察

小花と鉄扉と放射線

車で走ること1時間あまり。国道沿いに無数の白い小花をつけた夏草が生い茂る。その奥の木立には赤や黒、茶色の屋根の家並み。しかし、「ごめんください」と声を張り上げても、物音ひとつ返ってこない。

2014年7月3日、休暇中の私は、福島県浪江町（なみえまち）の中心街から約30キロ内陸にいた。さらに約20キロ内陸の二本松市へ行くために国道を走ってきたが、途中で道を間違え、行き止まりに突き当たった。目の前の道路は鉄扉で封鎖されている。走行距離は石巻港―鮎川港間に等しく、牡鹿半島から人が消えたような違和感だ。

その日の朝、私はマイカーで東松島市を出て、3時間後に浪江町に到着した。福島第一原発事故の被災地を視察する女川町議会の同行取材だった。浪江町は太平洋沿いの双葉郡の北端にある。町の南側は、福島第一原発がある双葉町（ふたばまち）と大熊町（おおくままち）に接する。

到着後、まずは女川町のバスと請戸（うけど）漁港へ向かった。津波をかぶった家々。打ち上げられた何隻もの船。震災半年後の女川町の光景だ。

次に中心街へ向かった。が、JR常磐線の浪江駅そばで私はバスを見失った。二本松市にある浪江町役場へ先回りするため、道順を尋ねにガソリンスタンドへ。除染作業車のために営業中だ。給油すると、1リットル171円。石巻市のスタンドより5円高い。

常磐線の鉄路は、草に覆われて緑のじゅうたんを敷き詰めたようだ。町の人口は約2万人。JR石巻駅界隈に似た街並み。窓辺に干された洗濯物が見える。すべて黄ばんでいる。この3年そのままなのだろう。別の家の窓から室内いっぱいに枝葉を広げた雑木が見える。国道沿いでは「帰還困難区域」の立て看板をいくたびも目にした。

約30キロ内陸で空間の放射線量は毎時1マイクロシーベルト。女川町の約20倍。のちに浪江町役場で聞かされた。――震災時、人々はそこへ避難した。高線量地帯とは知らされずに。近隣では約330マイクロシーベルトの記録も出た。

協力：ASA石巻中央、がんも大二、羽鳥書店、フロッグキングスタジオ